

が高く特に25~39才では差が著しい。

年令別に保有者率をみると、最も保有者率の高い年令層は5~9才で男子89.5%、女子90.9%と高率を示している。

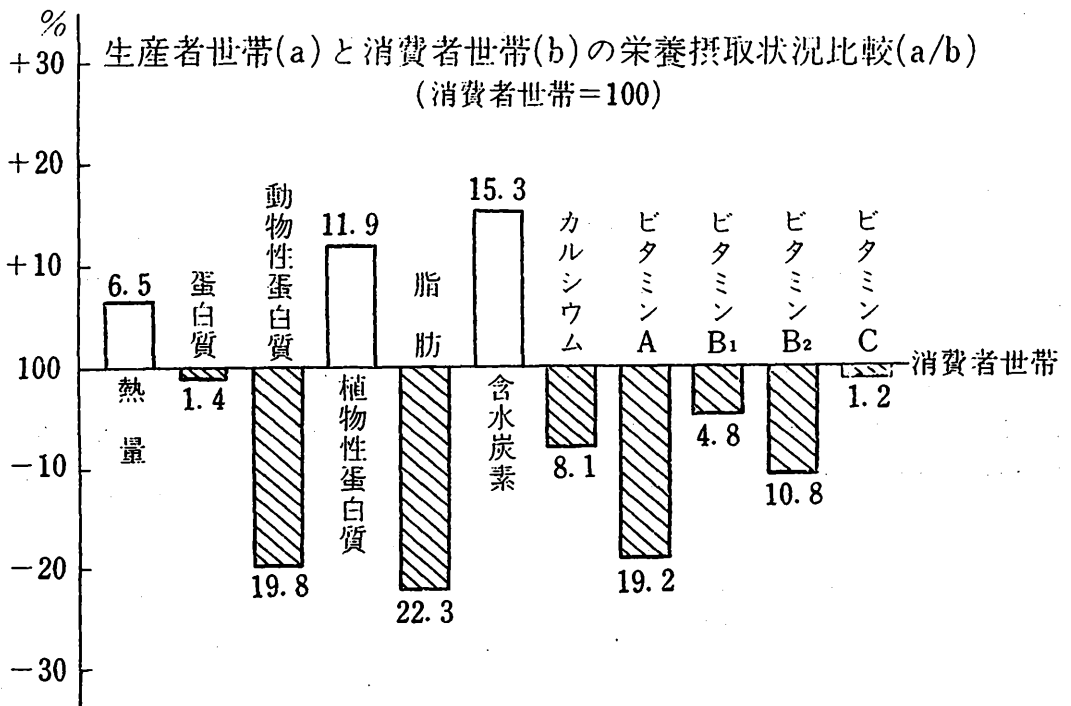
## B 業 態 別 成 績

### 1) 業態別1人1日当り栄養摂取量

世帯業態別に栄養摂取量を比較してみるとこの数年生産者世帯はかなり向上してきたものの消費者世帯に比べてはまだ立ち遅れた水準にある。

第6図は、生産者世帯と消費者世帯の差異をみるため消費者世帯の栄養摂取量を100とした場合の生産者世帯の比率を示したものであるが、この図で明らかなおり生産者世帯は消費者世帯に比べて摂取量の多いのは、熱量の(+) $6.5\%$ 、植物性蛋白質 $11.9\%$ 、含水炭素 $15.3\%$ の三要素だけであって、反面、動物性蛋白質は(-) $19.8\%$ 、脂肪(-) $22.3\%$ 、カルシウム(-) $8.1\%$ 、ビタミンA(-) $19.2\%$ 、ビタミンB<sub>1</sub>(-) $4.8\%$ 、ビタミンB<sub>2</sub>(-) $10.8\%$ 、ビタミンC(-) $1.2\%$ と少なく、重要な栄養素の摂取量は消費者世帯に比較して極めて低い水準にある。

第 6 図



このように消費者世帯は生産者世帯をかなり上回った栄養状態を示しているが、同じ消費者世帯を更に細分してみると、所得の少ない階層に属する日雇・家内労働者世帯の栄養状態は消費者世帯中最も低い水準にある。

#### (イ) 生産者世帯

熱量の摂取量は、2,170カロリーで前年に比べて若干減少しているが、全業態中では最も高く全国平均

を87カロリー上回っている。

蛋白質は、70.0グラム（うち動物性蛋白質23.9グラム）で、前年に比べ(+)1.4%、動物性蛋白質は(+)  
6.2%、脂肪は24.7グラムで(+)  
0.8%、カルシウムは387ミリグラムで前年と変わらず、ビタミンAは1,267  
国際単位で(+)  
5.2%、ビタミンB<sub>1</sub>は1.00ミリグラムで(-)  
2.9%、ビタミンB<sub>2</sub>は0.74ミリグラムで(+)  
2.8%、ビタミンCは79ミリグラムで(+)  
3.9%となっている。

第29表

栄養摂取量年次推移（生産者世帯）

	34 年	35 年	36 年	37 年	38 年
熱 量 Cal	2,218	2,194	2,210	2,186	2,170
蛋 白 質 g	68.8	68.9	68.6	69.0	70.0
動物性蛋白質 g	19.5	20.5	20.6	22.5	23.9
脂 肪 g	20.5	22.4	22.7	24.5	24.7
カルシウム mg	381	385	382	387	387
ビ タ ミ ン A I.U.	1,155	1,164	1,071	1,204	1,267
ビ タ ミ ン B <sub>1</sub> mg	1.09	1.08	1.03	1.03	1.00
ビ タ ミ ン B <sub>2</sub> mg	0.75	0.71	0.69	0.72	0.74
ビ タ ミ ン C mg	81	81	77	76	79

このようにビタミンB<sub>1</sub>と熱量が若干減少した以外は前年より増量されているが、動物性蛋白質、脂肪、  
ビタミンA等についてはいまだ水準より低い状態であるので今後一層の摂取増が望まれる。

なお、最近5年間における栄養摂取量の推移をみると34年に比べて動物性蛋白質と脂肪並びにビタミン  
Aは相当増加しているが、ビタミンB<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>、C等は伸び悩みの傾向を示している。

#### (ロ) 消費者世帯

熱量の摂取量は、2,038カロリーで前年に比べて僅かに増加している。

次いで蛋白質は、71.0グラムで若干減少し、この数年増加しつづけてきた動物性蛋白質が29.8グラムで  
前年の摂取量と変わらない点が目立っている。

脂肪は、31.8グラムで(+)  
4.3%、カルシウムは421ミリグラムで(+)  
2.7%、ビタミンAは1,569国際単  
位で(+)  
11.4%、ビタミンB<sub>1</sub>1.05ミリグラムで(-)  
8.7%、ビタミンB<sub>2</sub>0.83ミリグラムで(+)  
3.8%、  
ビタミンC80ミリグラムで(+)  
6.7%と、ビタミンB<sub>1</sub>を除く他の重要栄養素は比較的順調に伸びている。

第30表

栄養摂取量年次推移（消費者世帯）

	34 年	35 年	36 年	37 年	38 年
熱 量 Cal	2,046	2,044	2,036	2,026	2,038
蛋 白 質 g	69.9	70.2	70.5	71.2	71.0
動物性蛋白質 g	26.6	27.1	28.6	29.8	29.8
脂 肪 g	26.4	26.3	28.6	30.5	31.8
カルシウム mg	387	391	401	410	421
ビ タ ミ ン A I.U.	1,294	1,204	1,320	1,409	1,569
ビ タ ミ ン B <sub>1</sub> mg	1.03	1.03	1.05	1.15	1.05
ビ タ ミ ン B <sub>2</sub> mg	0.74	0.73	0.77	0.80	0.83
ビ タ ミ ン C mg	75	71	75	75	80

第31表

## 消費者世帯細分栄養摂取量

(38年5月)

	摂 取 量				対 前 年 比 (%)				
	事業経営者世帯	常用勤労者世帯	日雇・家内労働者世帯	その他の消費者世帯	事業経営者世帯	常用勤労者世帯	日雇・家内労働者世帯	その他の消費者世帯	
熱 量 Cal	2,029	2,047	1,997	2,019	98.1	101.1	99.6	100.8	
蛋白質 { 総 量 g	71.1	71.5	68.1	70.9	97.7	99.7	100.7	98.6	
	動物性 g	30.5	30.6	26.9	29.3	99.7	99.4	105.9	99.3
脂 肪 g	29.6	33.9	25.5	28.4	100.7	105.0	105.8	106.0	
カルシウム mg	427	432	374	440	103.1	101.4	97.9	104.8	
ビタミン { A I. U.	1,334	1,633	1,055	1,436	108.5	112.9	94.3	109.6	
	B <sub>1</sub> mg	1.04	1.07	0.98	0.99	95.4	97.3	102.1	96.1
	B <sub>2</sub> mg	0.81	0.87	0.74	0.80	97.6	103.6	0	97.6
	C mg	69	72	58	70	93.2	96.0	95.1	94.6

なお、最近5年間の推移をみると34年に比べて動物性蛋白質、脂肪、カルシウム、ビタミンA等は相当増加しており、この世帯の栄養状態はかなり改善されてきている。

次に5月調査において消費者世帯を細分調査した結果について検討してみると次のとおりである。

## — 事業経営者世帯 —

熱量の摂取量は、2,029カロリー、蛋白質は71.7グラム、動物性蛋白質30.5グラム、脂肪29.6グラム、カルシウム427ミリグラム、ビタミンA1,334国際単位、ビタミンB<sub>1</sub>1.04ミリグラム、ビタミンB<sub>2</sub>0.81ミリグラム、ビタミンC69ミリグラムで前年に比べてカルシウムと脂肪、ビタミンAを除く他の栄養素はすべて減少している。

## — 常用勤労者世帯 —

熱量の摂取量は、2,047カロリー、蛋白質は71.5グラム、動物性蛋白質30.6グラム、脂肪33.9グラム、カルシウム432ミリグラム、ビタミンA1,633国際単位、ビタミンB<sub>1</sub>1.07ミリグラム、ビタミンB<sub>2</sub>0.87ミリグラム、ビタミンC72ミリグラムで前年に比べて熱量、脂肪、カルシウム、ビタミンA、B<sub>2</sub>は僅かに増加したが、動物性蛋白質、ビタミンB<sub>1</sub>、ビタミンCは若干減少を示した。

この世帯は、ビタミンCを除く他の重要栄養素の摂取量は全業態中最も高い。

## — 日雇・家内労働者世帯 —

熱量の摂取量は、1,997カロリー、蛋白質は68.1グラム、動物性蛋白質26.9グラム、脂肪25.5グラム、カルシウム374ミリグラム、ビタミンA1,055国際単位、ビタミンB<sub>1</sub>0.98ミリグラム、ビタミンB<sub>2</sub>0.74ミリグラム、ビタミンC58ミリグラムで前年に比べて、動物性蛋白質、脂肪、ビタミンB<sub>1</sub>が若干増加しているが、カルシウム、ビタミンA、C等は減少している。この世帯は、すべての栄養素について摂取量はこの業態中最も低い水準にある。

## — その他の消費者世帯 —

熱量の摂取量は、2,019カロリー、蛋白質70.9グラム、動物性蛋白質29.3グラム、脂肪28.4グラム、カルシウム440ミリグラム、ビタミンA1,436国際単位、ビタミンB<sub>1</sub>0.99ミリグラム、ビタミンB<sub>2</sub>0.80ミリグラム、ビタミンC70ミリグラムで前年に比べて脂肪とカルシウム並びにビタミンAが若干増加しているが、動物性蛋白質、ビタミンB<sub>1</sub>、ビタミンB<sub>2</sub>、C等の栄養素は減少している。

第32表

栄養摂取量年次推移(その他の世帯)

	34年	35年	36年	37年	38年
熱量 Cal	2,068.2	2,064.8	2,070.4	2,093.1	2,063.3
蛋白質 g	68.1	69.4	69.9	70.2	70.4
動物性蛋白質 g	22.2	24.0	25.2	25.9	27.5
脂肪 g	20.8	22.1	24.4	23.8	25.1
カルシウム mg	384	395	400	405	402
ビタミン A I.U.	1,050	1,055	1,089	1,081	1,201
ビタミン B <sub>1</sub> mg	1.08	1.07	1.04	1.03	0.97
ビタミン B <sub>2</sub> mg	0.69	0.70	0.70	0.73	0.72
ビタミン C mg	79	79	74	68	72

## (ハ) その他の世帯

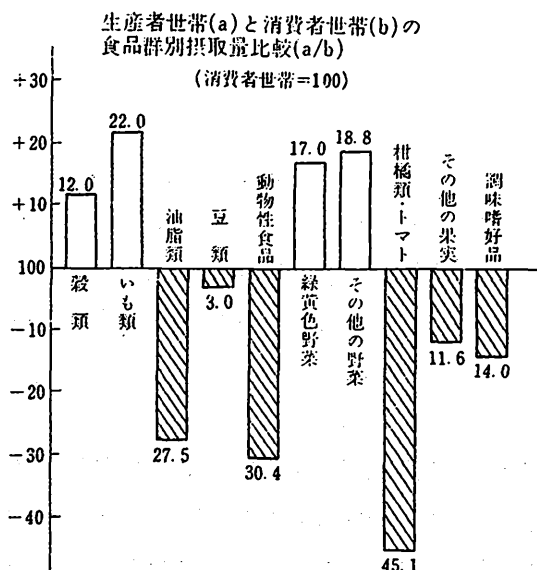
熱量の摂取量は、2,063カロリー、蛋白質70.4グラム、動物性蛋白質27.5グラム、脂肪25.1グラム、カルシウム402ミリグラム、ビタミンA1,201国際単位、ビタミンB<sub>1</sub>0.97ミリグラム、ビタミンB<sub>2</sub>0.72ミリグラム、ビタミンC72ミリグラムで前年に比べて動物性蛋白質、脂肪、ビタミンA、ビタミンCは若干増加しているが熱量、カルシウム、ビタミンB<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>は減少している。この世帯の摂取状況は、従来と同様前述の両業態の中間的な数値を示しているものが多い。

## 2) 業態別1人1日当り食品群別摂取量

食品の摂取状況を業態別に比較してみると、一般に生産者世帯は摂取食品の多くを自家生産物でまかなっている関係から植物性食品に依存する度合が大きく、消費者世帯に比べて食糧の消費水準はかなりおとっている。

第7図は、消費者世帯の食品摂取量を100とした場合の生産者世帯の比率を示したものであるがこの図で明らかなおとり生産者世帯は消費者世帯に比べて油脂類、動物性食品、果実類、調味嗜好品等の摂取量は相当下回っている。

第7図



消費者世帯は、野菜類の摂取がかなりおとっているので今後一層の摂取増が望まれる。

## (イ) 生産者世帯

穀類のうち米の摂取量は、391.9グラム、大麦は、23.0グラム、小麦44.4グラムでいずれも前年に比べて減少しており、特に小麦は、(-)15.3%減少している。

この小麦の内訳をみるとめん類と小麦粉の減少が目立っている。

いも類は、59.8グラムで前年に比べ(-)4.9%減少し、その内訳をみると馬鈴薯は若干増加したが甘藷は(-)14.0%と減少している。

砂糖類は14.8グラムで(+ )5.0%、油脂類

第33表

## 食品群別摂取量(業態別)

食 品 群 別			生 産 者 世 帯		消 費 者 世 帯	
			38 年 度 (g)	対前年度比 (%)	38 年 度 (g)	対前年度比 (%)
総	量	量	1,157.0	(+) 2.3	1,161.3	(+) 2.1
穀類	総	量	460.2	(-) 2.6	410.9	(-) 1.4
	米		391.9	(-) 0.3	328.1	(-) 0.6
	大小	麦	23.0	(-) 8.0	5.9	(-) 33.0
	雑	麦	44.4	(-) 15.3	76.6	(-) 1.3
	穀類		1.2	(-) 29.5	0.3	0
堅果類	果		0.4	(-) 33.4	0.4	0
	いも類	量	59.8	(-) 4.9	49.0	0
いも類	甘	薯	14.1	(-) 14.0	7.2	(-) 7.7
	馬鈴	薯	29.0	(+) 2.1	23.0	(+) 1.3
	その他のいも加工品		16.7	(-) 7.7	18.9	(+) 1.6
砂糖	糖	類	14.8	(+) 5.0	13.5	(+) 3.1
	脂	類	6.6	(+) 3.1	9.1	(+) 9.6
豆類	総	量	68.1	(+) 0.9	70.2	(+) 3.2
	大豆	豆	1.7	(-) 5.6	1.0	(+) 1.1
	味噌	噌	30.1	(-) 0.7	22.5	(-) 2.2
	大豆製品		29.9	(+) 2.0	41.5	(-) 3.9
	その他の豆類加工品		6.5	(+) 6.6	5.2	(-) 3.7
動物性食品	総	量	139.5	(+) 6.7	200.4	(+) 3.5
	魚介	類	77.9	(+) 13.1	76.4	(-) 1.0
	獣鳥肉	類	15.2	(-) 1.3	36.6	(+) 5.8
	卵	類	20.4	(-) 1.0	31.7	(+) 2.3
	乳及び乳製品		26.2	(+) 1.6	56.4	(+) 10.8
緑黄色野菜		44.8	(-) 3.4	38.3	(+) 10.4	
その他の野菜		139.8	(+) 3.5	117.6	(+) 3.3	
乾燥野菜(加工品を含む)		1.7	(-) 10.5	2.6	(+) 3.0	
野菜漬物		55.7	(+) 14.1	45.9	(-) 2.5	
柑橘類・トマト		19.7	(+) 12.6	35.9	(+) 7.8	
その他の果実		61.1	(+) 26.5	69.1	(+) 26.3	
海藻類		4.2	(-) 4.5	4.7	0	
調味嗜好品	醬油		30.0	(-) 4.8	23.6	0
	その他		50.9	(+) 16.2	70.5	(+) 1.3

第34表

## 食品群別摂取量年次推移(生産者世帯)

単位=g

		34 年	35 年	36 年	37 年	38 年
総	量	1,157.6	1,154.1	1,148.8	1,131.5	1,157.0
穀類		495.4	481.4	485.7	472.3	460.2
いも類		78.9	81.7	75.6	62.9	59.8
砂糖類		13.3	12.7	13.3	14.1	14.8
油脂類		4.6	5.6	5.6	6.4	6.6
豆類		67.6	68.3	68.2	67.5	68.1
動物性食品		106.7	116.9	115.6	130.7	139.5
野菜・果実		321.1	315.0	309.2	298.0	322.8
その他		70.3	72.5	75.8	80.3	85.5

6.6グラムで(+) $3.1\%$ 、豆類68.1グラムで(+) $0.9\%$ 、動物性食品139.5グラムで(+) $6.7\%$ と前年摂取量を上回っている。

また、野菜・果実類では、緑黄色野菜は44.8グラムで(-) $3.4\%$ 、その他の野菜139.8グラムで(+) $3.5\%$ 、柑橘類・トマト19.7グラムで(+) $12.6\%$ 、その他の果実61.1グラムで(+) $26.5\%$ となっている。

最近5年間における食品群別摂取量の推移をみると第34表のとおり、34年に比べて油脂類、動物性食品果実類は大幅に増加して食糧構成はかなり改善されてきている。

#### (ロ) 消費者世帯

穀類のうち米の摂取量は、328.1グラム、大麦5.9グラム、小麦76.6グラムでいずれも前年摂取量を下回っている。

いも類の摂取量は、49.0グラムで総量としては前年摂取量と変わらないが、その内訳をみると甘藷が(-) $7.7\%$ 減少して、馬鈴薯が(+) $1.3\%$ 増加している。

次に油脂類は9.1グラムで(+) $9.6\%$ 増加しているが、豆類は70.2グラムで(-) $3.2\%$ 減少している。

動物性食品は200.4グラムで(+) $3.5\%$ 増加しており、品目別にみると魚介類は若干減少し、獣鳥肉類、卵類、乳及び乳製品は(+) $5.8\%$ 、(+) $2.3\%$ 、(+) $10.8\%$ と増加している。

また、野菜類では緑黄色野菜は38.3グラム、その他の野菜117.6グラムで(+) $10.4\%$ 、(+) $3.3\%$ と増加を示している。

柑橘類・トマトは35.9グラム、その他の果実は69.1グラムで(+) $7.8\%$ 、(+) $26.3\%$ と順調に増加している。

第35表

食品群別摂取量年次推移(消費者世帯)

単位 = g

	34年	35年	36年	37年	38年
総量	1,104.3	1,116.1	1,124.2	1,137.5	1,161.3
穀類	438.5	438.0	425.8	416.9	410.9
いも類	55.9	53.1	53.8	49.0	49.0
砂糖類	11.9	12.1	12.6	13.1	13.5
油脂類	6.9	6.4	7.3	8.3	9.1
豆類	72.1	73.0	70.1	72.5	70.2
動物性食品	159.7	166.2	180.7	193.6	200.4
野菜・果実	280.1	282.4	285.2	285.9	309.4
その他	79.6	85.2	88.8	98.3	99.2

最近5年間の推移をみると34年に比べて、米、いも類、豆類等は減少して、油脂類、肉類、卵類、乳類等の動物性食品は平均して50%以上の大幅な増加を示している。

また、野菜類は僅かな増加にすぎないが、柑橘類・トマトおよびその他の果実類は(+) $17.3\%$ 、(+) $31.1\%$ の摂取増がみられる。

次に5月調査について消費者世帯を細分した各業態の食品摂取量は次のとおりである。

#### ——事業経営者世帯——

穀類のうち小麦の摂取量は72.0グラムで前年と変わらないが、米は340.8グラム、大麦は7.1グラムで若干減少している。

第36表

食 品 群 別	事業経営者世帯		常用勤労者世帯		日 雇 ・ 家 内 労働者世帯		その他の消費者世帯		
	38年度(g)	対前年(%) 度 比	38年度(g)	対前年(%) 度 比	38年度(g)	対前年(%) 度 比	38年度(g)	対前年(%) 度 比	
総 量	1,098.7	- 0.2	1,107.1	+ 1.2	1,011.0	- 1.1	1,079.6	+ 1.6	
穀 類	総 量	420.3	- 2.3	406.4	+ 0.2	434.5	+ 0.4	413.7	- 1.1
	米	340.8	- 2.0	320.5	+ 0.5	351.8	- 2.7	337.8	+ 1.9
	大 麦	7.1	-23.8	5.0	-43.2	21.8	+14.7	13.9	-28.4
	小 麦	72.0	+ 0.1	80.6	+ 3.7	59.6	+14.6	61.8	- 8.7
堅 果 類	雑 穀	0.4	0	0.3	0	1.3	+ 1.3	0.2	-50.0
	果 類	0.3	0	0.3	0	0.3	+50.0	0.2	--33.3
い も 類	総 量	38.8	- 1.8	42.0	- 0.2	38.2	-15.9	49.5	+25.3
	甘 藷	1.8	-52.6	3.2	- 5.9	7.3	+69.8	2.3	-43.9
	馬 鈴 薯	25.4	+ 7.2	26.4	- 1.1	22.2	-20.7	35.5	+51.7
	その他のいも	11.5	- 5.0	12.4	+ 2.5	8.8	-31.8	11.6	- 2.5
砂 糖 類	加工品	12.9	- 4.4	15.0	+ 4.9	12.7	+ 6.7	16.3	+16.4
	脂 類	7.9	+ 6.8	10.5	+ 8.2	7.0	+34.6	9.0	+30.4
豆 類	総 量	68.2	- 5.1	68.0	+ 1.8	65.4	-10.3	69.7	- 7.6
	大豆	0.6	-25.0	0.9	0	0.8	- 1.1	1.4	-12.5
	大 豆 製 品	22.7	- 7.7	22.7	- 1.7	23.9	-14.0	24.8	- 4.3
	その他の豆類	40.3	+ 0.5	39.3	+ 4.5	36.6	- 4.7	38.4	-10.5
動 物 性 食 品	加工品	4.6	-27.0	5.1	- 3.8	4.2	-26.3	5.1	+ 2.0
	総 量	197.0	+ 4.4	205.5	+ 0.8	157.7	+ 6.9	178.1	- 1.6
	魚 介 類	78.3	- 0.1	73.5	- 0.5	81.4	+ 8.1	83.3	+ 6.1
	獸 鳥 肉 類	35.9	+ 7.5	36.8	+ 3.1	23.7	+11.8	26.3	- 3.0
乳 及 び 乳 製 品	卵 類	29.5	- 3.6	35.4	0	24.5	- 2.8	28.7	-13.0
	乳 製 品	53.3	+12.9	59.8	+ 1.5	28.1	+ 8.9	39.8	- 6.1
緑 黄 色 野 菜	34.9	- 0.9	36.0	+ 2.0	31.7	-15.2	44.7	+18.6	
そ の 他 の 野 菜	124.7	+ 2.6	114.9	- 3.5	101.0	-10.8	116.8	- 1.0	
乾 燥 野 菜 (加工品を含む)	2.6	+ 8.3	2.7	+22.7	1.9	+90.0	2.8	+33.3	
野 菜 漬 物	35.7	- 5.1	36.8	+ 4.5	37.9	+ 6.8	29.4	- 8.1	
柑 橘 類 ・ ト マ ト	20.0	-18.4	25.4	- 7.3	17.6	+35.4	21.9	-15.4	
そ の 他 の 果 実	32.3	+18.8	39.6	+29.8	22.3	+31.2	34.4	+57.8	
海 草 類	5.2	+13.0	5.5	+ 7.8	5.1	+15.9	5.8	- 7.9	
調 味 嗜 好 品	醬 油	23.5	+ 0.4	23.0	- 1.3	26.8	- 8.5	29.3	+ 7.7
	そ の 他	74.4	+ 2.8	75.3	+ 2.3	50.9	- 8.3	57.9	+ 1.8

また、いも類は38.8グラム、豆類68.2グラムで(-)1.8%、(-)5.1%と減少している。

油脂類は7.9グラムで(+ )6.8%、動物性食品197.0グラムで(+ )4.4%と前年摂取量を上回っているが、野菜・果実類についてみるとその他の野菜類が124.7グラムで前年摂取量に比べて(+ )2.6%、その他の果実類は32.3グラムで(+ )18.8%と増加を示しているが、緑黄色野菜は34.9グラムで(-)0.9%、柑橘類・トマト20.0グラムで(-)18.4%と減少している。

——常用勤労者世帯——

穀類の摂取量は、406.4グラムで全業態中最も低く、そのうち米は320.5グラム、小麦は80.6グラムで前年に比べて、(+ )0.5%、(+ )3.7%と増加しているが、大麦は5.0グラムで大幅に減少している。

いも類は、42.0グラムで前年と変わらず、豆類は68.0グラムで(+ )1.8%と若干増加がみとめられる。

また、動物性食品は、205.5グラムで(+ )0.8%、緑黄色野菜は36.0グラムで(+ )2.0%、その他の果実

類は39.6グラムで(+ )29.8%と前年摂取量を上回ったが、その他の野菜類は114.9グラムで(- )3.5%、柑橘類・トマトは25.4グラムで(- )7.3%と減少を示した。

一般にこの世帯の食糧構成は、他の業態を上回る水準にある。

——日雇・家内労働者世帯——

穀類の摂取量は434.5グラムで消費者世帯中最も多く、そのうち米は351.8グラムで前年に比べ(- )2.7%減少したが、大麦は21.8グラム、小麦は59.6グラムで前年に比べて(+ )14.7%、(+ )14.6%と増加している。

いも類は38.2グラム、豆類は65.4グラムで(- )15.9%、(- )10.3%と減少してる。

次に、油脂類は7.0グラムで(+ )34.6%、動物性食品は157.7グラムで(+ )6.9%増加しており、品目別にみると魚介類が81.4グラム、獣鳥肉類23.7グラム、乳・乳製品28.1グラムでそれぞれ(+ )8.1%、(+ )11.8%、(+ )8.9%と増加を示したが、卵類は24.5グラムで(- )2.8%と若干減少している。

また、野菜、果実類についてみると緑黄色野菜は31.7グラム、その他の野菜類101.0グラムで(- )15.2%、(- )10.8%と前年摂取量を下回ったが、柑橘類・トマトは17.6グラム、その他の果実類22.3グラムで(+ )35.4%、(+ )31.2%と増加を示した。

概してこの世帯の食糧構成は全業態中最も低い水準にある。

——その他の消費者世帯——

穀類の摂取量は413.7グラムで前年に比べて(- )1.2%と若干減少している。

品目別にみると米の摂取量は337.8グラムで(+ )1.9%、大麦13.9グラムで(- )28.4%、小麦61.8グラムで(- )8.7%となっている。

次にいも類は49.5グラムで(+ )25.3%、油脂類は9.0グラムで(+ )30.4%と前年摂取量を上回っているが、豆類は69.7グラムで(- )7.6%減少している。

動物性食品は178.1グラムで前年に比べて(- )1.6%と若干減少し、品目別にみると魚介類は83.3グラムで(+ )6.1%、獣鳥肉類26.3グラムで(- )3.0%、卵類28.7グラムで(- )13.0%、乳・乳製品39.8グラムで(- )6.1%となっている。

また、野菜、果実類についてみると緑黄色野菜は44.7グラムで(+ )18.6%増加しているが、その他の野菜類は116.8グラムで(- )1.0%と僅かに減少している。

柑橘類・トマトは21.9グラムで(- )15.4%減少している。

(ハ) その他の世帯

穀類の摂取量は431.4グラムで前年に比べて(- )4.8%減少している。

品目別にみると米の摂取量は361.5グラムで(- )1.6%、大麦22.2グラムで(- )27.2%、小麦47.4グラムで(- )13.8%となっている。

次にいも類は54.2グラムで(- )4.9%、豆類68.1グラムで(- )4.1%と前年摂取量を下回っているが、油脂類は6.6グラムで(+ )24.5%、動物性食品は152.2グラムで(+ )3.7%増加している。

動物性食品を品目別にみると魚介類は88.6グラムで(+ )15.4%増加しているが、獣鳥肉類は18.5グラムで(- )6.6%、卵類23.1グラムで(- )0.4%、乳・乳製品22.0グラムで(- )18.5%と前年摂取量を下回っている。



野菜、果実類についてみると緑黄色野菜は45.0グラムで(+ )14.2%、その他の野菜類119.9グラムで(+ )0.5%、柑橘類・トマト19.5グラムで(+ )2.1%、その他の果実類56.4グラムで(+ )8.5%といずれも前年摂取量を上回っている。

最近5年間の推移をみると34年に比べて穀類は(- )5.2%、いも類(- )36.8%、豆類(+ )2.1%、油脂類(+ )29.4%、動物性食品(+ )31.1%、緑黄色野菜(+ )10.0%、その他の野菜類(- )13.4%、柑橘類・トマト(+ )23.4%、その他の果実類(+ )39.3%となっており、概してこの数年間に穀類、いも類、その他の野菜類は減少し、油脂類、動物性食品、果実類は増加の傾向を示している。

### 3) 食品群別栄養構成

世帯業態別に各栄養素の食品群別摂取構成を検討してみると、生産者世帯はこの数年かなり改善されてきているが、消費者世帯に比べると各栄養素とも植物性食品、特に穀類等に依存する度合が高く、栄養構成はかなり低い水準にある。

第37表

熱量、蛋白質、脂肪の食品群別摂取比率(業態別)

単位=%

食品群別	熱 量			蛋 白 質			脂 肪		
	生産者世帯	消費者世帯	その他の世帯	生産者世帯	消費者世帯	その他の世帯	生産者世帯	消費者世帯	その他の世帯
総 数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
穀 類	70.8	64.7	69.2	44.1	38.0	40.8	16.6	12.6	15.5
い も 類	2.4	2.0	2.4	1.6	1.2	1.4	0.8	0.9	1.2
砂 糖 類	2.6	2.6	2.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
油 脂 類	2.6	3.6	2.7	0.0	0.0	0.0	25.1	25.8	24.7
豆 類	5.2	5.0	5.2	11.9	10.6	11.2	16.2	12.9	16.3
動物性食品	8.8	12.9	10.2	34.1	42.0	39.1	34.0	39.9	35.5
野菜・果実	4.4	4.6	4.3	6.4	5.6	5.8	2.8	2.5	2.8
そ の 他	3.2	4.6	3.1	2.0	2.5	1.8	4.5	5.4	4.0

一方、消費者世帯は他の世帯群と比較すると熱量、蛋白質、脂肪等各栄養素は動物性食品から摂取する度合が高く栄養構成はすぐれているが、消費者世帯の中でも日雇・家内労働者世帯は極めて低い水準にある。

#### — 熱 量 —

生産者世帯では熱量の70.8%を穀類から摂取しているが、消費者世帯は64.7%で6%程低い。また、いも類からの摂取率も生産者世帯が2.4%で消費者世帯の2.0%を上回るが、動物性食品および油脂類からの摂取率は消費者世帯が12.9%、3.6%で上回っている。

その他の世帯では穀類からの摂取率は69.2%で生産者世帯より若干低いが、消費者世帯よりも高く油脂類、動物性食品からの摂取は消費者世帯より低く、大体生産者世帯と消費者世帯の中間の摂取形態を示している。

次に5月調査で実施した消費者世帯を細分した結果について最近5年間の推移をみると各業態ともに穀類からの摂取率は年々低下しており、一方油脂類、動物性食品からの摂取率は増加し、熱量の摂取構成は質的に改善されてきている。

常用労働者世帯が穀類からの摂取率が64.0%で最も低く、次いで事業経営者世帯とその他の消費者世帯

第38表

熱量の摂取比率(消費者世帯細分・38年5月)

単位=%

業 態 別	総 数	穀 類	いも類	砂糖類	油脂類	豆 類	動 物 性 食 品	野菜果実	そ の 他
事業経営者世帯	100.0	67.0	1.5	2.5	3.2	4.8	12.9	3.6	4.5
常用勤労者世帯	100.0	64.0	1.7	2.8	4.2	4.9	13.5	3.8	5.2
日雇・家内労働者世帯	100.0	71.3	1.7	2.5	2.9	4.6	10.7	3.0	3.3
その他の消費者世帯	100.0	67.0	2.0	3.1	3.7	5.1	11.6	3.7	3.8

ともに67.0%であり、日雇・家内労働者世帯は71.3%と極めて高率である。

また、油脂類、動物性食品などからの摂取率からみて熱量の摂取構成は常用勤労者世帯が最もすぐれており、事業経営者世帯がこれに次いでいる。

#### — 蛋白質 —

穀類からの蛋白質摂取率は、生産者世帯44.1%、その他の世帯40.8%、消費者世帯38.0%であり、生産者世帯、その他の世帯ともに穀類が蛋白質摂取量の最も大きい割合を占めている。

動物性食品からの摂取率は、消費者世帯42.0%で最も高く、次いでその他の世帯39.1%、生産者世帯34.1%となっている。

最近5年間の推移をみると各世帯とも穀類からの摂取率は年々低下し、動物性食品からの摂取率が高くなっている。

次に5月調査で消費者世帯を細分して調査した結果についてみると、動物性食品からの摂取率は常用勤労者世帯が42.8%で最も高く、次いで事業経営者世帯42.5%であり、日雇・家内労働者世帯は穀類からの摂取率が42.6%で他の世帯を上回り、逆に動物性食品からの摂取率は39.5%で最も低い。

#### — 脂 肪 —

脂肪の給源としては、動物性食品の占める割合が最も高く、消費者世帯は39.9%、その他の世帯35.5%、生産者世帯34.0%となっている。

また、油脂類は、消費者世帯25.8%、生産者世帯25.1%、その他の世帯24.7%である。

穀類からの摂取率は、生産者世帯16.6%、消費者世帯12.6%、その他の世帯15.5%である。

その他食品については各業態間に大差はみられない。

最近5年間の推移をみると穀類、豆類の比率は低下し、動物性食品、油脂類の摂取率が高くなっている。

#### 4) 業態別食材料費

昭和38年度の食材料費を業態別にみると消費者世帯の食材料費は最も高く172.70円、その他の世帯139.07円、生産者世帯は131.53円である。

最近5年間における各業態別の食材料費の推移をみると食材料費は相当伸びているが、生産者世帯と消費者世帯の間にはかなりの差が認められる。

##### (イ) 生産者世帯

生産者世帯の食材料費は131.53円で前年に比べて(+ )12.1%増加している。

しかし、消費者世帯に比べて金額で41.17円も下回る。

第39表

1人1日当り食材料費および比率(業態別)

		金 額(円)				構 成 比(%)				対 前 年 比(%)			
		全 国	生産者世帯	消費者世帯	その他の世帯	全 国	生産者世帯	消費者世帯	その他の世帯	全 国	生産者世帯	消費者世帯	その他の世帯
総	量	157.47	131.53	172.70	139.07	100.0	100.0	100.0	100.0	(+)10.2	(+)12.1	(+)9.8	(+)14.7
穀	類	42.73	45.20	41.29	44.22	27.1	34.4	23.9	31.8	(+)8.1	(+)10.3	(+)6.3	(+)13.1
い	も	3.75	3.54	3.88	3.49	2.4	2.7	2.2	2.5	(+)15.0	(+)13.1	(+)16.5	(+)10.4
油	脂	2.61	1.69	3.17	1.74	1.7	1.3	1.8	1.3	(+)6.5	(+)5.0	(+)7.8	(+)20.0
豆	類	7.23	7.11	7.29	7.16	4.6	5.4	4.2	5.1	(+)1.8	(-)10.2	(+)2.4	(+)8.6
魚	介	21.96	17.88	24.13	21.96	13.9	13.6	14.0	15.8	(+)16.1	(+)25.9	(+)12.3	(+)33.8
肉	卵	27.40	14.59	35.00	17.60	17.4	11.1	20.3	12.7	(+)9.6	(+)4.8	(+)12.5	(+)1.4
野	菜	16.14	15.36	16.63	14.40	10.2	11.7	9.7	10.4	(+)6.7	(+)7.0	(+)6.2	(+)17.4
果	実	10.76	7.16	12.94	7.27	6.8	5.4	7.5	5.2	(+)14.8	(+)12.4	(+)17.3	(+)1.8
調	味嗜好品	19.44	14.58	22.29	16.01	12.3	11.1	12.9	11.5	(+)12.9	(+)17.7	(+)12.1	(+)18.3

食品群別に支出構成をみると穀類を除く各品目で消費者世帯をかなり下回っており特に動物性食品、油脂類、果実類の差が著しい。

## (ロ) 消費者世帯

消費者世帯の食材料費は172.70円で業態中最も高く前年の157.28円を(+ )9.8%上回っている。

食品群別にみると消費者世帯の総額中の占める穀類の割合は23.9%(41.29円)で前年の24.7%を若干下回っている。

また、動物性食品に要した費用は59.13円で前年に比べ(+ )12.4%、油脂類は3.17円で(+ )7.8%、野菜類16.68円で(+ )6.2%、果実類12.94円で(+ )17.3%、調味嗜好品22.29円で(+ )12.1%といずれも前年を大きく上回っている。

なお、5月調査における消費者世帯の細分した結果についてみると常用勤労者世帯の食費は174.95円で前年に比べ(+ )10.8%増加して最も多く、次いで、事業経営者世帯は167.26円で(+ )8.3%増加している。

第40表

1人1日当り食材料費および比率(消費者世帯細分・38年5月)

		金 額(円)				構 成 比(%)			
		事業経営者世帯	常用勤労者世帯	日雇・家内労働者世帯	その他の消費者世帯	事業経営者世帯	常用勤労者世帯	日雇・家内労働者世帯	その他の消費者世帯
総	額	167.26	174.95	134.22	157.86	100.0	100.0	100.0	100.0
穀	類	41.17	40.14	40.34	40.95	24.6	22.9	23.4	25.9
い	も	3.35	3.65	2.89	3.33	2.0	2.1	1.7	2.1
油	脂	2.85	3.80	2.40	2.99	1.7	2.2	1.4	1.9
豆	類	7.01	7.01	6.24	7.05	4.2	4.0	3.6	4.5
魚	介	23.71	22.26	19.57	24.39	14.2	12.7	11.3	15.5
肉	卵乳	31.84	35.83	19.96	24.91	19.0	20.5	11.6	15.8
野	菜	19.67	20.02	14.89	20.27	11.8	11.4	8.6	12.8
果	実	9.62	12.12	6.43	9.77	5.8	6.9	3.7	6.2
そ	の	-	-	-	-	-	-	-	-

日雇・家内労働者世帯の食費は134.22円で前年に比べ(+ )10.4%増加しているが、消費者世帯中最も低く、常用勤労者世帯に比べて40.73円も下回っている。

5) 栄養欠陥による身体症候 (業態別発現状況)

業態別に身体症候の発現状況をみると、その他の世帯が24.4%で最も高く、生産者世帯は23.2%と高率に発現しているが、消費者世帯は18.7%でかなり低い。

第41表

業態別身体症候発現率

単位=%

症 候 別	生産者世帯	消費者世帯	その他の世帯
健康者	76.8	81.3	75.6
有症者	23.2	18.7	24.4
貧血	1.5	1.7	2.2
口角炎	4.9	2.3	4.0
毛孔性角化症	4.9	3.0	3.4
けん反射消失	9.3	8.9	10.4
ひ腹筋圧痛	6.5	4.0	7.3
浮腫	2.9	3.0	4.7

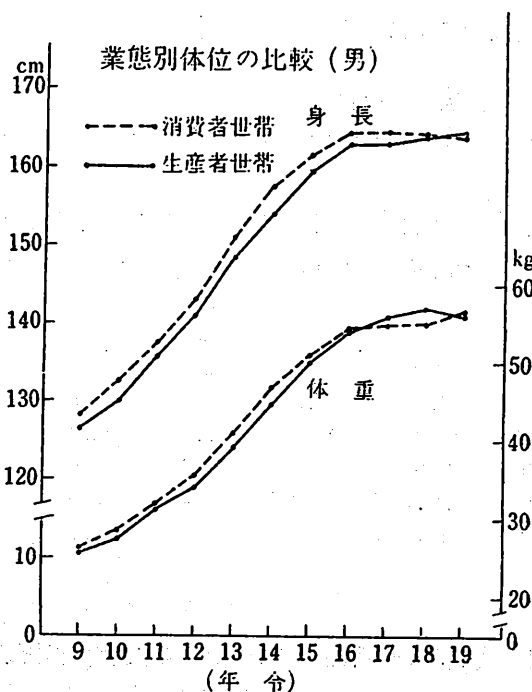
前年と比較してみると、生産者世帯とその他の世帯は若干減少しているが、消費者世帯は僅かに増えている。

症候別にみると各世帯ともけん反射消失が最も高く、その他の世帯10.4%、生産者世帯9.3%、消費者世帯8.9%となっている。

次いでひ腹筋圧痛が、その他の世帯7.3%、生産者世帯6.5%、消費者世帯4.0%であり、生産、消費の両世帯で特に著しい差のあるものは口角炎で生産者世帯の4.9%に対し消費者世帯は2.3%となっている。

年令階級別にみると各世帯ともに年令の増加にともなって有症率は高くなり、生産、消費の両世帯を比較すると5才未満の年令層では大差はないが

第 8 図



5~9才は生産者世帯の18.0%に対し消費者世帯は12.9%、25~29才は生産者世帯の27.3%に対し消費者世帯は20.1%、40才以上では生産者世帯の32.2%に対し28.3%とかなりの差が認められる。

症候別にみると特に差の著しいのは口角炎で、例えば5~9才では生産者世帯は8.1%であるが消費者世帯は3.0%にすぎない。

6) 体 位 (業態別)

生産者世帯と消費者世帯の別に体位を比較してみると一般に消費者世帯は生産者世帯に比べて青少年の発育は良好である。

まず身長についてみると第8図に明らかなおりとおり、9~18才までは全年令を通して消費者世帯は生産者世帯をおおむね2~2.5cm程

第42表

業 態 別 体 位 の 比 較 ( 男 子 )

年 令	身		長		体		重	
	生産者世帯		消費者世帯		生産者世帯		消費者世帯	
	cm	対前年増減	cm	対前年増減	kg	対前年増減	kg	対前年増減
1才未満	63.5	- 1.8	66.2	- 0.4	7.18	-0.35	7.73	-0.26
1	77.6	+ 0.2	79.0	+ 0.3	9.91	-0.37	10.50	-0.07
2	89.1	+ 3.0	87.5	+ 0.5	12.21	-0.04	12.56	+0.16
3	93.3	+ 0.2	94.3	- 0.2	13.64	-0.41	14.27	+0.14
4	99.8	+ 0.6	100.9	- 0.3	15.50	+0.02	15.66	-0.18
5	105.3	- 0.3	106.6	+ 0.2	17.05	-0.14	17.59	+0.21
6	111.1	+ 0.1	111.8	- 1.0	19.13	+0.27	19.20	-0.38
7	116.1	- 0.3	117.2	- 0.4	21.12	+0.08	21.19	-0.25
8	120.8	- 1.6	123.1	- 0.5	22.79	-0.49	23.63	-0.49
9	126.6	0	128.1	+ 0.6	25.84	+0.32	25.97	-0.05
10	130.1	- 1.0	132.6	- 1.2	27.43	-0.49	28.59	-0.67
11	135.6	- 0.9	137.5	+ 0.1	31.31	+0.27	31.57	+0.63
12	141.1	- 0.5	143.2	- 0.2	34.27	-0.51	35.48	-0.44
13	148.3	+ 0.7	151.0	- 0.2	39.44	+0.88	40.85	-0.31
14	154.2	- 0.9	157.5	+ 0.9	44.76	-0.14	46.93	+1.01
15	159.6	- 1.2	161.7	+ 1.2	50.02	-0.74	50.87	+0.39
16	163.1	+ 1.7	164.6	+ 2.0	53.96	+2.64	54.38	+0.88
17	163.3	- 0.8	164.6	+ 0.8	55.83	-0.43	54.91	-0.57
18	163.7	- 1.0	163.8	- 0.3	56.90	-0.26	55.27	-0.31
19	164.5	+ 0.4	164.0	- 1.0	56.25	+0.23	56.45	-0.59
20	163.1	- 0.1	165.3	+ 0.6	56.38	-0.10	56.25	-0.90

度上回っている。

特に発育期の13~17才にかけての差は著しい。

体重については16才位までは消費者世帯が生産者世帯を上回っているが、17~18才はこの関係が逆になって生産者世帯の方が上回る。

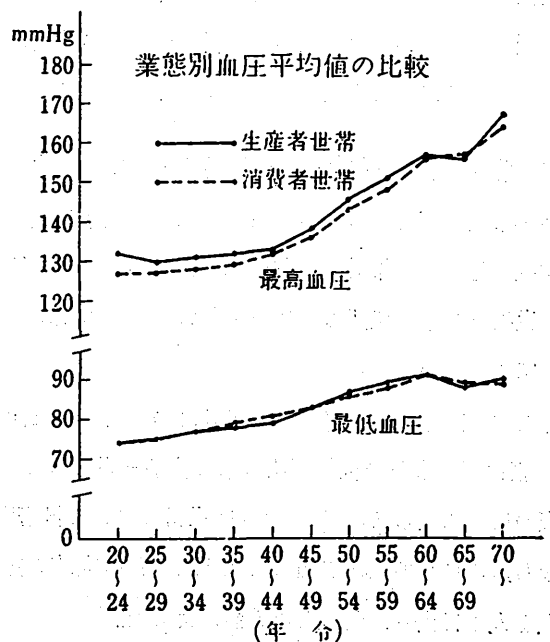
女子の身長、体重もほぼ男子と同じ傾向を示している。

次に上腕囲と胸囲についてみると身長、体重ほどの差はないが、消費者世帯は乳幼児期から小中学校の年令層にかけて生産者世帯を上回るが16才をこえると生産者世帯の方が上回っている。

7) 血 圧 (業 態 別)

昭和38年度の血圧平均値の成績を業態別に

第 9 図



第43表

業態別体位の比較(女子)

年 令	身 長				体 重			
	生産者世帯		消費者世帯		生産者世帯		消費者世帯	
	cm	対前年 増 減	cm	対前年 増 減	kg	対前年 増 減	kg	対前年 増 減
1才未満	62.6	- 0.4	65.4	+ 0.6	6.79	-0.02	7.38	-0.01
1	77.3	+ 1.2	77.7	+ 0.6	9.83	+0.41	10.08	+0.22
2	84.7	+ 0.1	86.7	+ 0.2	11.47	+0.05	12.02	-0.03
3	92.4	+ 0.5	93.4	- 0.2	13.42	+0.29	13.83	-0.01
4	98.9	+ 1.7	100.2	+ 0.3	14.87	+0.22	15.40	+0.03
5	104.2	0	106.7	+ 1.4	16.42	-0.11	17.09	+0.17
6	110.1	- 0.3	111.3	- 0.2	18.17	-0.24	18.64	-0.02
7	115.6	- 0.2	117.1	+ 0.7	20.16	-0.44	20.88	+0.20
8	120.2	- 1.6	121.1	- 1.0	22.39	-0.49	22.50	-0.56
9	125.3	- 0.7	126.9	- 0.6	24.73	-0.69	25.30	-0.44
10	131.3	- 0.7	133.6	- 0.5	27.96	-0.12	29.05	+0.01
11	139.1	+ 0.2	139.5	+ 1.5	32.76	+0.36	32.21	+0.13
12	143.1	- 0.9	146.1	+ 0.9	35.83	-1.33	38.63	+1.21
13	147.2	- 0.7	150.0	+ 0.3	40.31	+0.01	42.05	+0.39
14	150.1	- 0.8	151.5	0	45.68	+0.16	44.58	+0.22
15	151.6	+ 0.1	153.3	- 0.6	46.95	-1.85	48.04	-0.28
16	153.4	- 0.1	154.0	+ 1.6	50.00	-0.80	49.48	+0.38
17	152.3	- 1.6	154.0	+ 0.7	50.04	-2.20	50.66	+0.42
18	152.4	+ 0.9	153.1	+ 0.1	51.37	+1.97	49.32	-1.00
19	150.6	- 2.7	153.1	+ 0.4	49.50	-2.48	50.16	+0.48
20	152.8	- 0.2	153.0	0	50.99	-0.45	49.69	+0.17

比較すると第9図のとおりで生産、消費の両世帯間に特に大きな差異は認められないが、最高血圧は生産者世帯が僅かに消費者世帯を上回っている。

両世帯ともに40才をこえると最高血圧が急激に上昇する傾向は例年のとおりである。

最低血圧については両世帯間に目立つほどの差異は認められない。

また、性別にみても業態別の男女間で特に大きい差はみとめられない。

### C 世帯別・栄養摂取状況調査成績

国民栄養調査では各世帯の最多収入者の職業分類によって、生産者世帯、消費者世帯、その他の世帯の3業態に分類して集計し、業態別成績或いは全国成績として1人1日当りの平均値で示されていた。しかし、世帯別の栄養状態は、各世帯間にかかなりの差があると推定されていたにもかかわらず、その実態は明らかにされていなかった。

そこで、昭和37年2月調査の集計に当って、約1,000世帯の世帯別集計を行なって各世帯についての熱量、蛋白質摂取量の世帯単位の栄養状態を明らかにすることができた。昭和38年度調査においても11月調査の集計に当って同じく約1,000世帯について世帯別集計を行なった。

なお、これらの比較に当ってはそれぞれの実数を各世帯の家族の年令、労働条件などの要素にもとづき成人1人1日当りに換算した数値によった。

ただし、熱量および蛋白質所要量の数値は、昭和35年栄養審議会発表の成人換算率の数値を用いた。